

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593366

研究課題名(和文) 養護教諭のためのフィジカルアセスメント教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Developing a Physical Assessment Education Program for Yogo Teachers

研究代表者

葛西 敦子 (KASAI, ATSUKO)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：80185735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：養護教諭は、「子どものからだをみる」視点であるフィジカルアセスメントの知識・技能を身につけることが必須である。本研究の目的は、養護教諭養成教育や現職養護教諭研修において実践できるフィジカルアセスメント教育のプログラムを構築することである。そこで、(1)養護教諭養成大学の教員を対象とし「子どものからだをみる」フィジカルアセスメント教育に関する実態調査 - 養成背景別(教育系・学際系・看護系)の比較 -、(2)養護教諭への模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムの実践および評価、(3)養護教諭養成課程学生への「頭が痛い」と訴える子どものフィジカルアセスメント教育プログラムの評価を行った。

研究成果の概要(英文)：For yogo teachers, acquiring the knowledge and techniques to carry out physical assessment expertly is an absolute necessity. The object of this research was to develop a physical assessment education program suitable for yogo teacher training courses and training courses for in-service yogo teachers. This was achieved via a three-pronged approach: 1. A survey of faculty at yogo teacher training colleges regarding the physical assessment education of students (comparisons between education, interdisciplinary, and nursing departments); 2. An evaluation of a physical assessment education program for yogo teachers, using simulated cases; 3. An evaluation of a physical assessment education program for yogo teachers in which it is observed how easily children can complain of headaches to students of a Yogo Teacher Training Course.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：養護教諭 フィジカルアセスメント 養護教諭養成教育 現職養護教諭研修

1. 研究開始当初の背景

フィジカルアセスメント教育は、日本の看護系大学で1990年代後半より導入されるようになった。養護教諭養成教育の中で、フィジカルアセスメント教育の重要性について、学会などで議論されだしたのは近年のことである。養護教諭養成教育の中で、科目「看護学」は10単位を必修とするが、その教育内容について明記されたものはない。近年の子ども健康課題や健康問題への対応のためには、「看護学」教育の中で「子どものからだをみる視点」であるフィジカルアセスメント教育は必須である。「養護教諭のためのフィジカルアセスメント」研究は、本研究者の研究業績があり、今後の研究に期待される。

2008(平成20)年1月17日に中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するための学校全体としての取り組みを進めるための方策について」が出された。その中で、「養護教諭が子どもの現代的な健康課題に適切に対応していくためには、常に新たな知識や技能などを習得していく必要がある。」ことが示された。この答申を踏まえた学校保健安全法が、2009(平成21)年4月1日から施行された。その中で、養護教諭は「学校保健活動の推進に当たっては中核的な役割」であり、「子どもの現代的健康課題への適切な対応などの早期発見、早期対応に果たす役割」を求めている。また、2009(平成21)年4月1日から教員免許更新制が導入された。その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すものである。このような流れの中で、養護教諭には「子どものからだをみる視点」であるフィジカルアセスメントの知識技能を身につけることが必須と考えた。

2. 研究の目的

養護教諭は、学校教育法で「児童生徒の養護をつかさどる」と定められた医学的素養、看護学的技能等の知識技能を身につけた専門職である。子どもの健康課題や健康問題への対応のために、「子どものからだをみる視点」であるフィジカルアセスメントの知識技能を身につけることが必須である。しかし、その知識技能が十分といえないことが指摘されている。近年の答申や法律等からも養護教諭への期待は大きく、フィジカルアセスメントの習得が喫緊の課題となっている。本研究の最終目的は、養護教諭養成教育並びに現職養護教諭研修において実践できる「子どもの訴え」に対応したフィジカルアセスメント教育のプログラムを構築することである。

3. 研究の方法

(1) 養護教諭養成大学の教員を対象とした「子どものからだをみる」フィジカルアセスメント教育に関する実態調査 - 養成背景別(教育系・学際系・看護系)の比較 - 調査対象・期間・方法

日本養護教諭養成大学協議会に加入している93大学(教育系18大学・学際系25大学・看護系50大学、2011年4月現在)に所属する「養護に関する科目」の中で「看護学」を担当している教員を対象に、2012年2月中旬から3月下旬に、郵送によるアンケート調査を実施した。

調査内容

養護教諭の養成背景については、1.教育系、2.学際系、3.看護系の別、フィジカルアセスメントの基礎技術を教授する総コマ数、および1コマの設定時間について調査した。

フィジカルアセスメント項目が、養護教諭養成教育において、「必要である」のか「必要でない」のかの回答を求めた。また、現在その項目についての教育を「実施している」のか「実施していない」のかの回答を求めた。現在実施しているフィジカルアセスメント教育の満足度については、「1.満足している」

「2.まあ満足している」「3.あまり満足していない」「4.満足していない」の4件法で回答を求めた。さらに、フィジカルアセスメント教育について、課題と考えていることを回答してもらった。

(2) 養護教諭への模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムの実践および評価

模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムに沿った研修の実践

2012年10月A地区養護教諭47名を対象に、模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムに沿った研修「救急処置に活かすフィジカルアセスメント - 緊急性の高い頭痛・腹痛を見逃さないために -」を実施した。

模擬事例を用いたフィジカルアセスメント研修の評価

教育プログラムを評価するために、研修終了後にアンケートを実施した。また、模擬事例を用いたことの効果を判断するために、事例を用いないで実施した「症状に対するフィジカルアセスメント」研修後のアンケート結果と比較した。

《本研修後のアンケート(本調査)》

本研修後の調査内容は、1.基本的属性について、2.本研修で扱ったフィジカルアセスメント項目に関して、3.実践しているその他のフィジカルアセスメント項目(自由記述)、4.もっとフィジカルアセスメントができればよかったという事例の経験の有無、5.フィジカルアセスメント技術を身につける必要性を日常的に感じているか否か、6.研修の総合評価、7.事例検討を通じての感想・意見、であった。

《「症状に対するフィジカルアセスメント」研修(模擬事例なし)後のアンケート(対照調査)》

2007年9月ワークショップ「養護教諭のた

めのフィジカルアセスメントの実際」を養護教諭14名を対象に実施した。その終了後に実施したアンケートを対照とした。

調査内容は、フィジカルアセスメント項目(眼の視診、瞳孔の検査、他動的頂部屈曲検査、ケルニッヒ徴候検査、副鼻腔の触診、口腔内の視診、リンパ節の触診、腹部の触診)に関して、実践経験の有無、今後の実践意欲の2項目について尋ねた。

(3) 養護教諭養成課程の学生への「頭が痛い」と訴える子どものフィジカルアセスメント教育プログラムの評価

「頭が痛い」と訴える子どものからだをみる - フィジカルアセスメントの実際 - : 教育プログラムの概要

1. 第1回目(2コマ(90分×2)): 「頭が痛い」と訴える子どもに必要なフィジカルアセスメントに関して各項目の知識・技術の習得を目的とした。授業は、講義(40分)、デモンストレーション(50分)、実習(50分)、演習(30分)、まとめ(10分)で構成した。

2. 第2回目(2コマ(90分×2))(第1回目の1週間後に実施した): 模擬事例を用いて、「頭が痛い」と訴える子どもに必要なフィジカルアセスメントに関して各項目の知識・技術の習得を目的とした。授業は、演習(90分)、実習(40分)、演習(40分)、まとめ(10分)で構成した。

対象及び方法

対象は、A大学の3年次学生29名、B大学の3年次学生19名であった。授業は、A大学では前期「学校救急処置」の中で、第1回目を平成25年7月19日、第2回目を7月26日に実施した。B大学では前期「学校看護学実習」の中で、第1回目を7月23日、第2回目を7月30日に実施した。

調査内容

第1回目、第2回目ともに授業終了後に、フィジカルアセスメント16項目について理

理解度・実践度を自己評価してもらった。理解度・実践度は、「どのように診るかわかる（以下、「観察」とする）」「正常か正常逸脱かわかる（以下、「判断）」」「実践のどの場面で使えるかわかる（以下、「実践）」」「自信をもってできる（以下、「自信）」」の4項目で評価してもらった。それらを「十分できる」「できる」「あまりできない」「できない」での4件法について回答してもらい、4点、3点、2点、1点に得点化した。また、16項目の得点を合計したものを総合得点「観察」、「判断」、「実践」、「自信」とした。

4. 研究成果

(1) 養護教諭養成大学の教員を対象とした「子どものからだをみる」フィジカルアセスメント教育に関する実態調査 - 養成背景別（教育系・学際系・看護系）の比較 -

すべての教員が、教育は「必要である」と回答したフィジカルアセスメント項目は、58項目中【3眼】の視診・視診（眼瞼結膜）、【7歯】の視診、【8皮膚】の視診、【10腹部】の触診、【13全身】の視診（姿勢・歩行）の6項目であった。

必要性の有無について養成背景別の比較では、【5鼻】の通気性検査・嗅覚検査、【6口腔】の口臭・味覚異常の4項目で、有意な差があった。「必要である」が概ね教育系で有意に少なく、看護系で有意に多かった。

「実施している」と回答した割合が50%に満たなかった項目は、【5鼻】の通気性検査・嗅覚検査、【6口腔】の味覚異常、【7歯】の打診（叩打痛）の4項目であった。

実施の有無について養成背景別の比較では、【4耳】の間こえの検査（音叉）・平衡機能検査、【5鼻】の嗅覚検査、【6口腔】の味覚異常、【9胸部】の打診、【10腹部】の打診、【13全身】の触診（知覚）の7項目で、有意な差があった。「実施している」が教育系で有意に少なく、看護系で有意に多いものがあった。

現在実施しているフィジカルアセスメント教育に「満足している群」は、教育系25.0%で少ない傾向にあり、看護系66.7%で有意に多かった。

フィジカルアセスメント教育への課題は、教育系・学際系では「時間数が確保できない」が多く、看護系では「養護教諭に必要なフィジカルアセスメントが明確でない」が多かった。

以上より、養護教諭養成大学における「子どものからだをみる」フィジカルアセスメント教育の現状は、フィジカルアセスメント各項目に対する教育の必要性の有無や実施の有無は、養成背景別に違いがあった。現在、養護教諭の養成機関は教育系、学際系、看護系と多岐にわたるが、いずれの大学においても、質の高い養護教諭を養成する責務がある。そのためには、養護教諭養成に関わる担当者間で議論を重ね、養護教諭の専門性に特化したフィジカルアセスメント教育を構築していくことが求められる。

(2) 養護教諭への模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムの実践および評価

養護教諭を対象として行った模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムは、研修後の理解度・必要性の認識・実践意欲から判断して、効果が認められた。受講者の総合評価も、模擬事例を用いなかった場合に比べ有意に向上した。

研修の効果を高めるためには、用いる模擬事例が1. 必要なフィジカルアセスメントを行わなければ判断できない事例であり、2. 日常遭遇しうる現実的な事例であることが必要である。また、教育プログラムの導入部分に模擬事例について検討させる時間を設けることが重要であると考えられる。

(3) 養護教諭養成課程の学生への「頭が痛

い」と訴える子どものフィジカルアセスメント教育プログラムの評価

フィジカルアセスメント項目に対する理解度・実践度の自己評価 - 第1・2回目の得点の比較 -

有意に得点が高くなった項目は【1 痛む部位の観察】の「実践」「自信」、【5 口腔内の視診】の「観察」「判断」「実践」「自信」、【7 頭頸部リンパ節の触診】の「観察」「判断」「実践」「自信」、【8 項部硬直(自動的頸部屈曲試験)】の「実践」、【9 項部硬直(他動的頸部屈曲試験)】の「実践」、【15 腹部の聴診】の「判断」、【16 腹部の触診】の「実践」であった。また、有意に得点が低くなった項目は【11 ケルニッヒ徴候の検査】の「観察」「自信」、【13 上肢のパレー徴候の検査】の「観察」「判断」「自信」、【14 下肢のパレー徴候の検査】の「観察」「判断」「自信」であった。

フィジカルアセスメント項目に対する理解度・実践度の自己評価 - 第1・2回目の総合得点の比較 -

総合得点「観察」については、有意差はなかった。総合得点「判断」「実践」は、有意に得点が高くなった。また、総合得点「自信」は、有意に得点が低くなった。模擬事例を展開することで、学生自身が子どもの状態を具体的にイメージすることができ、判断力や実践力は増したものの、自信は低下してしまった。

総合的判断による第1回目と第2回目の授業の比較

「第1回目・第2回目の授業で、フィジカルアセスメントの知識・技術についての習得はできたか」の質問では、1.第1回目の方が習得できた6.3%、2.第2回目の方が習得できた43.8%、3.第1回目も第2回目も同じように習得できた50.0%であった。自由記述では、「第1回目の授業では知識・技術を学ぶことができた。第2回目では第1回目で得た知識・技術を活かして、養護教諭としての実践

力を習得できたと思う。第1回目、第2回目と段階を分けて進んでいくことができ、学習しやすかったし、フィジカルアセスメントの重要性や必要性をより理解することができた」という意見があった。

以上より、模擬事例を用いてのフィジカルアセスメント教育プログラムでは、「どのように診るかわかる」の観察はでき、「正常か正常逸脱かがわかる」の判断力が増し、「実践のどの場面で使えるかがわかる」の実践力が身に付いた。しかし、「自信をもってできる」の得点が低下したことは、模擬事例でのフィジカルアセスメント教育の限界であった。その後の教育となる学校現場における養護実習などで、学生が実際に症状を訴える「子どものからだをみる」ことで、自信の向上に繋がっていくものと期待する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

佐藤伸子・葛西敦子・三村由香里・松枝睦美・中下富子，養護教諭への模擬事例を用いたフィジカルアセスメント教育プログラムの実践および評価，日本健康相談活動学会誌，査読有，第9巻第1号，2014，pp.31-46

葛西敦子・中下富子・三村由香里・松枝睦美・佐藤伸子，養護教諭養成大学の教員を対象とした「子どものからだをみる」フィジカルアセスメント教育に関する実態調査 - 養成背景別(教育系・学際系・看護系)の比較 - ，日本養護教諭教育学会誌，査読有，第17巻第2号，2014，pp.27-40

[学会発表](計 3件)

葛西敦子・佐藤伸子・三村由香里・松枝睦美・中下富子，養護教諭養成課程学生への「頭が痛い」と訴える子どものフィジカル

アセスメント教育プログラムの評価, 日本健康相談活動学会第10回学術集会 平成26年3月1日(岡山市), 2014, pp.110-111
佐藤伸子・葛西敦子・三村由香里・松枝睦美・中下富子, 現職教員への事例を用いたフィジカルアセスメント研修プログラムの評価, 日本健康相談活動学会第9回学術集会 平成25年3月3日(札幌市), 2013, pp.84-85
葛西敦子・中下富子・三村由香里・松枝睦美・佐藤伸子, 養護教諭養成大学における「子どものからだをみる」フィジカルアセスメントに関する教育の現状, 日本養護教諭教育学会第20回学術集会 平成24年10月7日(名古屋市), 2012, pp.74-75

〔図書〕(計 1件)

監修: 山内豊明, 編者: 三村由香里・岡田加奈子, 著者: 葛西敦子・河田史宝・佐藤伸子・芝木美沙子・津村直子・中下富子・本田優子・松枝睦美, 東山書房, 保健室で役立つ ステップアップ フィジカルアセスメント, 2013, pp.307

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葛西 敦子 (KASAI, Atsuko)

弘前大学・教育学部・教授
研究者番号: 80185735

(2) 研究分担者

三村 由香里 (MIMURA, Yukari)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 10304289

松枝 睦美 (MATSUEDA, Mutsumi)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 30347653

佐藤 伸子 (SATO, Nobuko)
熊本大学・教育学部・講師
研究者番号: 10226946

中下 富子 (NAKASHITA, Tomiko)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号: 50398525

(3) 連携研究者

()

研究者番号: